都市の型枠

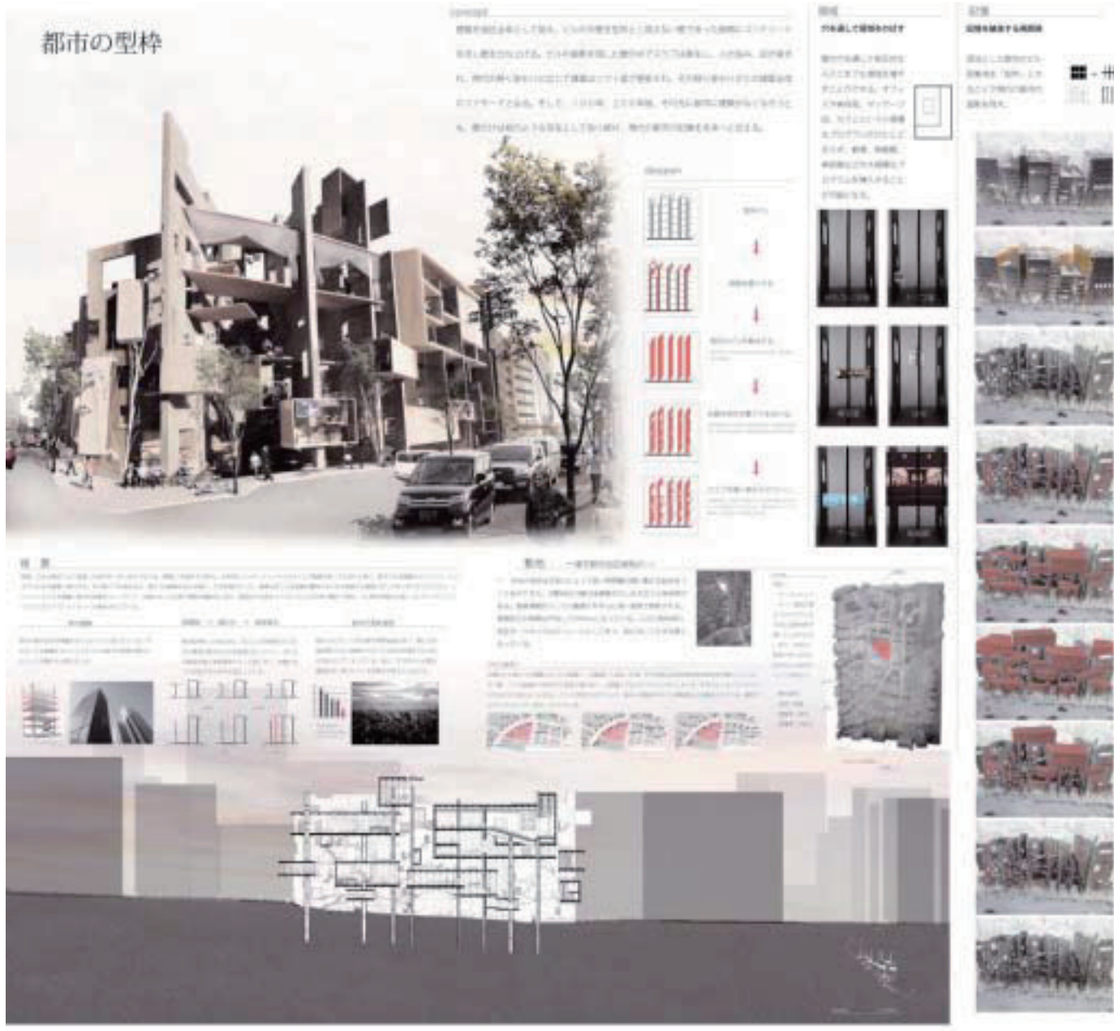
最優秀賞

JIA全国出品作品

矢野　健太（やの けんた）
千葉工業大学　工学部　建築都市環境学科

20世紀の建築はスラブを積層させることで床面積を最大限まで獲得した。その結果、市街地において、ビル同士は満員電車のように極めて距離が近い反面で関わりが遠いものとなった。そして、建築と建築の間には意味をなさない小さな隙間が現れた。

私は建築を街区全体として捉え、ビルの外壁を型枠とし隙間にコンクリートを流し壁を立ち上げる。ビルの面影を残した壁の中でスラブは寄生し、人が住み、店が営まれ、時代の移り変わりに応じて建築はソフト面で更新される。それは更新速度が早く、隙間だらけの街でしかできない方法である。100年、200年後、その先に都市に建築がなくなろうとも、壁だけは岩のような存在としてあり続け、現代の都市の記憶を未来へと伝える。



講評

いつも見慣れた渋谷公園通りに未知なる建造物を出現させた。この作品のテーマは、都市のスクラップアンドビルドされて行く建物へのオマージュか、敢えて言うならば都市のヴァナキュラーとも読み解くべき現代への痛烈な批判と捉えられる。

建築物とその間（はざま）の関係を反転させる様に間（はざま）を型枠と見立て未来永劫の記憶となる構造物として成立させる事で建築行為がスタートする。彼の作品（模型）を注視するとその造形は、荒々しい型枠（岩）と不規則なスラブ・壁の軽快さが見る人を引き付ける。そしてその理由は、実際に鉄筋を配してコンクリートを打設した凡そ100kgの重量を擁した模型かも知れない。そしてこの作品思想は、間（はざま）を有効利用などと考えずに「記憶に残す為の型枠（岩）として自由なスラブと開口が伴う可変的な空間が作り出す都市空間に寄り添う人々のコミュニティが派生する事にある。とにかくこの発想はとても興味深く・面白い。（審査委員：山下　勲）